

氏名	キム 金	ソ 昭	ヨン 延
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第335号		
学位授与年月日	平成23年3月25日		
学位論文等題目	〈作品〉 daze insulātus 〈論文〉 写すもの、あるいは映るものの不在－見ることへの考察を通して眺めの概念から－		

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(美術学部)	河北秀也
(論文第1副査)	〃	准教授	( 〃 )	布施英利
(作品第1副査)	〃	教授	( 〃 )	箕浦昇一
(副査)	〃	准教授	( 〃 )	松下計
( 〃 )	〃	〃	( 〃 )	藤崎圭一郎

(論文内容の要旨)

第1章では、イメージと視覚世界の本質を探り、本論の前提となる用語を整理し、解説した。「見る」ことに対する疑問を視覚のメカニズムから問い直し、視覚意識の変容と断層のなかから、選択された視覚言語としてのイメージを概観する。

第2章では、見ることと所有することという写真の性質を対象性に立脚して考察する。「それは・かつてあった」というロラン・バルトの論考を始発点とし、時間と対象をキーワードに用いて、写真の意味を探る過程とした。また、写す、映される(写される)、眺めるという三つの指向が、まなざしとメッセージによって一連のつながりを持つと定義した上で、自身の作品制作の根本的概念を提示した。

第3章では、具体的な参考作品を挙げ、絵画の歴史の流れに突如現われた写真と、結果的には、互いに比較の対象となった写真と絵画が筆者自身の作品観に与えた影響について考察することで、自身の「眺め」の概念を提示し、不在性／不明瞭な対象、不鮮明な表層／抽象的写真表現をキーワードとして分類した参考作品の分析を行なった。

第4章では、自作品のテーマおよび表現方法を述べている。本論を通して触れてきた写真の表層と深層についての考察をふまえ、論文のタイトルにもなっている「写すもの、あるいは映るものの不在」を、無名性、色と光、眺め、流れと断絶というテーマの中で具体的に示し、より個人的な体験の表出による作品の推移と考察過程について述べた。また、自作品を通してみる、本論の意義と今後の制作活動についての課題を結論として示した。

作者と対象が浮かび上がってこない写真に如何なる意義を見出せるのか。そこにはただ、「見る」という知覚の認識の循環がもたらすイメージのまなざしだけが、「眺める」という無意識と意識の世界を歩き来しながら存在する。そして、純粋な視覚である「眺め」は、カメラ・アイを通り道にすることで、新たな感覚を与える次の次元の視覚世界へ変貌する。本論文では、不在性についての考察を経て行き着いた、不鮮明というアプローチと「眺め」の概念を通して、「見ること」に起源する根本的な要素を引き出し、作品制作の意義と今後の作品活動の方向を見出すことを目指した。

私たちは日常的に写真に接している。街には写真を使用した広告が溢れ、テレビや印刷媒体などを通して知らぬ間に写真から様々な情報を得ている。このように写真を含む映像表現は昨今の時代を視覚の

時代とまで言わしめており、見えすぎている過剰な視覚情報に私たちは疑問を持つことも少ない。文字が情報伝達の最大の手段であった過去の時代に「挿絵」は、文字の付加的説明として機能していたにすぎなかっただろう。しかし現代において、機能上で挿絵にとって代わることになった写真は、文字自体を付加説明へと変えてしまうほどの強力な手段として台頭するようになった。だが、写真は情報伝達のための手段以外の意味を持っている。つまり、写真の本質は、情報伝達の意義を超えたところにあるのだ。写真を通して私たちは「見る」という、根源的で純粋な視覚世界に気づくことがある。あくまで現実には似た姿を見せる写真は、記録と再現という性質を持ちながら、純粋な「見る」体験へと私たちを誘う。写真は言葉にたよらず、イメージのみで観察者に対して自由に開かれた意味を与え、それを介して広がる想像力を引き出す力を持っている。本論は、写真を「写す」ことを立脚点とし、「映す」という撮影に至る行為と、それ以降に繰り返し広げられるであろう「見る」ことについて、私自身の思索と制作に照らし合わせて行なった論考の過程である。

私は、不鮮明で不確かな対象をテーマとして制作を行なってきたが、そのなかで、私の存在自体も対象と同様に不鮮明であり、写真が発するまなざしそのものにはなっていないことを意識するようになった。それゆえに、写真の本質が対象をもって作者自身のまなざしを語るものとしたら、私の作品は無意味なものになってしまうのではないかと懸念するに至った。作者としての私が、積極的に私自身を語ったり、なにかを訴えかけたりすることなく、「私」が自ら写した写真の表層同様に、あいまいで不確かなものにすぎないという性質を有するとするならば、このことをどのように説明できるのだろうか。そして、鑑賞者はその作品を前にしてなにを感じ取るのか。その答えを、見えていること、見ることは何か、「写す」と「見る」とはどのように関係するのかについて常に抱いていた疑問を解決することから探したいと考えた。

#### (博士論文審査結果の要旨)

本論文は、写真作品の制作をベースに、デザイン研究を行ってきた筆者による、見ること、映像、また写真の対象としての光景、などをめぐる論考である。

ほんらい、写真というのは現実をあるがままに写すメディアである。デジカメや携帯電話が日常の道具になった現在、写真が切り取った現実の断片はいたるところに溢れている。シャッターを押せば、誰にでも写真が撮れる。しかし、写真というのは「それだけ」の表現メディアなのだろうか。筆者は、写真技法の鍛錬と、写真をめぐる思索を繰り返すことで、写真の本質へ迫ろうとする。それが本論文のテーマである。

筆者は、こう書く。

「写真は情報伝達のための手段以外の意味を持っている。つまり、写真の本質は、情報伝達の意義を超えたところにある。」

そのような観点から、筆者は、単なる情報伝達に終わらない、写真のもっと深い意義を論じていく。本論文の第1章では、「見る」ことや「イメージ」について論じ、第2章ではさらに見ることのなかから「写真」に話題を絞り込む。次の第3章では、写真を絵画と比較論考し、無名性という独自の概念を導き出し、最後の第4章では、光、色彩、空気感などを写真にどう取り込むか、それを自身の作品制作の実践と絡めながら論考していく。

筆者は、デザイン専攻であるが、この論文では表面的な論旨としては、デザインという社会と関わる視覚表現の、具体的なあれこれには触れない。その代わりに、そのベースにある視覚表現、写真というものの「原理」を探究する。デザインへの応用は、その後にはやってくる。まずは原理をしっかりと固めたい、ということであろうか。

もちろん、デザインの現場には、さまざまな現実というものがある。しかしそれは、デザインの職に

ついた後に、臨機応変に対応していけばよいものでもある。それより重要なのは、まずはどんな応用も可能な基礎となるべき原理を会得することであろう。

その意味で、本論文の筆者の論考は大学院の教育・研究成果としては意義あるものである。また、筆者は日本語を母国語とする者ではないが、その文章は明快で読みやすく綴られている。そのような表現のベースとなる文章世界を築き上げたことは高く評価できる。

よって本論文を、東京藝術大学大学院美術研究科の博士論文として合格とする。

#### (作品審査結果の要旨)

キムソヨンの作品には《daze》、《insulätus》という研究作品題目がついている。《daze》とは「光が目くらませる、ぼうっとさせる」という意味である。《insulätus》とは「島のようにぼつんとした、水に囲まれて島になった」という意味である。対象は画面の表層からは消え去り、レンズから取り入れられた光だけが残る。流れ行く水と光のイメージは永遠に続くようで続かない。繋がっているようで繋がっていない。そんなシリーズ作品に《daze》、《insulätus》という研究作品題目がつけられたのである。

まさに彼女が研究し続けてきた研究課題にぴったりの題目となっている。それが何かわからないものを描くことが自分の目標だとした画家のウィリアム・ターナーの研究から始まり、抽象的表現で写真作品と見場違うような作品を作った松本陽子を研究した。写真でありながら、ディテールを捨て絵画のような写真を目指したエドワード・ジャン・スタイクン、実像がなく名前を持たない誰かをめざすということで、ベッヒャー夫妻や杉本博司の写真を研究。不鮮明なイメージを用いるウタ・バース、ゲルハルト・リヒターへと到達する。さらに抽象的表現の写真家ヴォルフガング・ティルマンズ、ジェームス・ウェリングを研究し自己作品を制作した。試行錯誤の段階だが、この段階を通過し完成へと向かっている。

#### (総合審査結果の要旨)

キムソヨンは写真について一貫して追求してきた。それはこの研究テーマの通り、「写すもの、あるいは映るものの不在」ということである。写すものとは、写真家本人。映るものとは、その写真ということである。しかしキムは、その写真について考察を始めた。そして、純粋な「見る」行為こそが写真の根源的意義だと予測した。キムが行った写真の実験では、被写体をぼかし拡大することでその不在感を見せるものや、境界を曖昧にしたもの、また物語のメッセージ自体の「不在と無名性」をコンセプトにしたものが多くみられる。「それは、かつてあった」というロラン・バルトの論考を始発点とし、時間と対象をキーワードに用いて、写真の意味を探ったもの。リアリティについて問い直し、見る、写す、映ることの循環したまなざしについて考察したもの。映される(写される)、眺めるという三つの指向が、まなざしとメッセージによって一連のつながりを持つと定義した上で、自身の作品制作の根本的概念を提示したものなどがある。

また論文には絵画の歴史の中に突如表れた写真と、芸術のなかで常に比較されてきた絵画がキム自身の作品観に与えた影響なども考察している。最初は忠実に再現してくれる写真に魅力を感じたが、次第に自らが選択した対象を演出した写真を好むようになった。しかし、次第に撮りたいと考える対象が(たとえ人物であっても)個性や意味が「何のものでもない誰か」になっていることに気づくことになる。多くのそのような考えの画家や写真家を研究し、その深淵な考えを理解し自己の作品に生かして行く。この難しいテーマに取り組むキムは試行錯誤を繰り返し作品としている。この新しい根源的な表現領域に立ち向かう姿勢は高く評価できる。博士号を取得するのにふさわしいと判断した。